

人減る高知を「人」の手で 高知を支える「人」のちから 未来を切り開くヒントを「人」に求めて

INDEX

街路市のこれからを見据えて…………… 07P

水の人 持続可能な社会を目指して…… 08P

どう育てる、「田舎に残る」若者たち…… 09P

学生たちが可能性を見いだしたのは、やはり「人」。わがこととして人口減少社会を考えるきっかけになった高知の「今」。FLPジャーナリズムプログラム松田ゼミ高知取材合宿報告第2弾です。



にぎわう街路市(写真提供=高知市役所)

街路市の これからを見据えて

嵯峨真実 (法学部2年)

松田ゼミ



道路や水路上に色とりどりの旬野菜や果物が並び、出店者とお客さんの掛け合いが心地よくすすむ——そんな日常が高知にはある。高知市はほぼ毎日市が立つ“市文化の街”。市はまとめて『土佐の街路市』と呼ばれ、長い間人々に親しまれてきた。

しかし、近年は客数・出店舗数の減少、後継者不足といった課題も多く、その存続を危ぶむ声もある。街路市を残すために、今なにが求められているのか。

出店者、様々な思い

「新規を増やして空コマを埋めるべき」「先に行動すればいい影響ができることも」と前向きな出店者。一方、「うちも私が出店できなくなったらおしまい」とどこか諦めた雰囲気話す出店者もいる。

さらには、街路市のこれからについて見通しを持ってない出店者も多く、課題対策は一筋縄ではいきそうにない。

生活市としての街路市

街路市を管轄するのは高知市役

所産業政策課。街路市係の野田真也さん(36)は、『街路市＝生活市』と何度も強調した。

観光市化で歴史ある市がいくつも衰退したことが生活市にこだわる理由だという。現在市役所では、生活市を軸に課題を再整理し改善するための構想(街路市活性化構想)を進めている。

構想を受け実施された取り組みの一例が出店条件の規制緩和だ。「これを機に幅広い層に“私たちでも出店できるんだ」という認識をもってもらえれば」と野田さん。また、市近くのトイレ美化や学生による販売体験の受入など、できることから順番に取り組んでいる。

一方で、行政は発信力が強いいため、様々な立場に偏りのない結論を出そうとして行き詰まってしまう弱点もある。

行政が生活市にこだわる理由には、「最近、地のモノを売らないコマが増えた」「これでは街路市らしさが失われる」という出店農家の声を無視できない面も少なからず存在している。

若者の奮闘

SMS(Sunday Market Supporters)は日曜市の継続と発展を目指す学生支援団体。毎日曜、観光案内所を運営し、時には出店者の作物収穫や販売の手伝いをするなど彼らの活動は多岐にわたる。

中でも特に、日曜市の役立ち情報や販売商品を紹介した出店者向けの新聞(SMS新聞)の発行は好評だ。

そんなSMSにはもう一つ重要な活動がある。それは学生の視点から市が抱える課題の原因を考察・分析すること。SMS代表の野村珠里さん(21)は1995年の街路市規制を例に挙げ、こう分析する。「行政は産直市との差別化と『街路市＝生活市』を売り出す目的でこの規制を行ったが、実際には規制後出店が



高知市役所産業政策課にて
左から宮崎晃さん、野田真也さん



SMS取材時
右奥から石元佑弥さん、野村珠里さん

しづらくなり、かえって『街路市≡産直市』という状況に陥ってしまった」

行政に対しても、SMSの視点から自由に発言する。“日曜市離れ”世代の若者でありながら、市を愛し奮闘する姿は人々にいい刺激を与えている。

街路市のこれからを見据えて

出店者・行政・若者に共通するのは「街路市を存続させたい」という

熱い思い。行政は公に発信力があるものの枠に捉われがち、若者は自由な発想のもと発言できるが後ろ盾がない。

取材を通じて私は街路市を守るためには、行政と若者が連携し、弱点を補い合うことが必要だと思った。高知県民の温かい人柄という魅力はそのままに、課題改善の流れを皆で協力し、更に大きくする。土佐の街路市の行方に期待したい。

水の人 持続可能な社会を目指して

佐藤紗矢子 (経済学部2年)

松田ゼミ



「風の人」「土の人」 そして「水の人」

地域おこしでは、外から来た「風の人」と地元の「土の人」が合わさり、風土が生まれると言われている。「風の人」と「土の人」をつなぐのは「水の人」。それは、風土をより豊かにし、地域おこしを加速させたいと考える人のこと。移住者であり、自身を「水の人・アイデアを作る百姓」と呼ぶ吉富慎作さん(38)にお話を聞いた。

増える「風の人」

吉富さんの暮らす高知県は、全国平均より15年先行して人口減少が

進んでいると言われている。空き家増加など地域の課題を多く抱える高知県だが、高知市・土佐山地域では移住者が増え空き家がなくなり、待機者がでている。

移住者の多くは特定非営利活動法人「土佐山アカデミー」のワークショップに参加した人たちである。2012年に「次の100年のために、地域の資源を生かし、新たな出会いやアイデアを育む、学びの場」として設立された土佐山アカデミーは土佐山地域で大きな力を発揮している。

「水の人」による活動

人口減少など地域の課題を解決

する方法の一つに移住がある。吉富さんは空き家対策をワークショップで取り上げたとき、地域でなにか挑戦したい人に、車やコミュニティ、家を提供できる状況をつくりたかったという。現在行っているワークショップは企業や行政に向けたものが多い。行政の研修として空き家改修をおこなった際には、行政は地域の現状を学ぶことができ、土佐山アカデミーは地域の課題である空き家をコストをかけずに改修できた。このように、企業・行政が地域の現場を学ぶことで地域課題を解決できる。その両者の間にいるのが土佐山アカデミーだ。

「土の人」×「風の人」× 「水の人」=おもしろい田舎

他にも多くの課題が残る土佐山地域。高齢化や人口減少が進む中、地域住民だけでは地域課題の解決は難しい。地域の外から来た人が多くの情報や解決策を持っていたとしても、地域住民と考えがすれ違ってしまふことは少なくない。「水の人」の役割は、地域課題を資源と考え、課題を明確化し、誰かがチャレンジできるように編集して、面白い解決策を持った人を呼ぶこと。

「地域の人を先生にして学ぶことと、逆に都会の人が(土佐)山の課題

を解決していく。その仕組みを作り出す必要がある」と吉富さんが語るように、地域の課題を新しい価値に変えてくれる「風の人」と、地域を知り尽くした「土の人」を繋げる「水の人」が、今、重要になってきているといえる。

「土の人」にとって地域課題、 「水の人」から見ると資源

吉富さんは「僕らがやっていることは、面白いが否かかってこと。面白い田舎じゃないと残れない。やればやるほど仲間が増える仕組み、企業の学びが地域の課題を解決する。」と話す。地域の課題は資源である。そう吉富さん



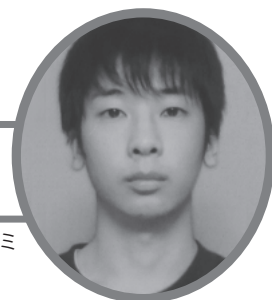
土佐山アカデミー
事務局長 吉富慎作さん

が語るように、課題があればあるほど、その地域は「面白い」地域として成長していける。「土の人」にとっての地域の課題をいかに心惹かれるものにし、「風の人」を取り込むか。今、吉富さんのような地域に密着しながら課題を編集していく「水の人」が求められている。

どう育てる、 「田舎に残る」若者たち

大城佑生 (法学部4年)

松田ゼミ



田舎離れを教育で

若者の田舎離れは教育の立場から防ぐことはできないのか。学生が羽ばたく「自由」な活躍と人口流出問題との間にはまだまだ課題が多い。

本来であればわざわざ田舎から都会へ出ることはお金もかかり、非常に苦勞することである。少子高齢化が進む高知県に向かい、若者の考え方と身近に関わる教育について聞いた。

行政の立場から

「高知のために働く人材を」ということを強く出そうかという話もあったのですが、「ちょっとそれは違うだろう」と

高知県教育委員会事務局教育政策課チーフの津野哲生さん(43)は話す。昨年3月に県教委が第2期高知県教育振興基本計画の基本理念として掲げた目指すべき人間像は「学ぶ意欲にあふれ心豊かでたくま

しく夢に向かって羽ばたく子どもたち」と「郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材」

肝心の若者がそもそも減少していく一方で何とか若者を留めたいが、教育は若者が自由を手にするためのものでなくてはならない。そんなジレンマがこの問題を複雑なものにしている。

「高知県に住むかどうかは若者が自分の力で判断して決める。判断す

る力をつけるところまでが教育の役割。高知に残る、あるいは戻ってくるかどうかは教育の問題というより県の魅力を作っていく大人の責任の問題では」と津野さんは語った。

県教委事務局教育政策課主任指導主事の堅田勇人さん(47)は「キャリア教育の一環として、高知県の現状や課題、特色、歴史、文化など、郷土に関するいろんな情報を子どもたちにしっかり伝えていくことで、誰もが郷土の良さも悪さも知っているという状態を作っていきたい」と話す。



土佐高・小村教頭(右)にインタビューする高本ゼミ生(2年)

少なくともそういう情報に触れる機会をずっと作り続ける必要がある。

学校の立場では

一方、教育の最前線である学校ではどう感じているのか。私立土佐高校教頭先生の小村彰さん(61)は「一人ひとりの進路についての県外に行くか行かないかというのは、進学と就職という二面がある」と話す。

教育をすればするほど高い目標を持つ学生が増え、現状では県内と比べると県外のほうが魅力的な大学が多いため、高校卒業後に県外に出てしまう。

「帰ってくるならまず県庁、それから県内の銀行、県内のメディア、マスコミ関係、そういったところがどうしても中心になる。いわゆる大企業がないし、製造業は非常にふるわない

県ですから、どうしても第三次産業、そうなる銀行などに限られてしまいますよね」と小村さんは話す。

一度県外に出て、戻ってこようとしても、大学を出たことを生かして活躍できる就職の場も足りていないのだ。

田舎離れを防ぐには

まずは、教育にもっと支援することが必要だ。そうしないと都内外の格差は広がる一方なので、学校と行政が協力しながら解決を目指すべきだ。

若者は教育を受けるほど経済的、文化的により良い環境を自由に選び、結果として都心に集中し、一方で地方では少子化が加速する。この「選択の自由」を続けるには地方の雇用環境も教育と同じレベルを進めて、若者を呼び込める状態にすることが必要である。

— 電子書籍アプリ「白門書房」 —

『白門書房』は、中央大学が発行する広報誌を集めた、電子書籍配信アプリです。

『HAKUMON Chuo』のバックナンバーはもちろん、これまで印刷物のみで配布していた中央大学の大学案内誌や学部ガイドブック、大学院・専門職大学院案内、附属学校案内などを、電子ブックの形式でダウンロードできます。

利用方法は簡単。iOS の場合はApple Inc. が運営するApp Store(アップストア)から、Androidの場合はGoogle Inc. が運営するGoogle Play から無料でダウンロードできます。App Store およびGoogle Play へは、無線LAN(Wi-Fi)を通じてどこからでもダウンロードできます。

『白門書房』ダウンロード後は、インターネットへの接続環境がなくても、電子ブックを開くことができます。

過去のバックナンバーや他の媒体を読みたい場合は、4GやWi-Fiを通じて何冊でもダウンロード可能です。

本電子書籍・ドキュメント配信システムは、2016年3月現在、99冊の大学広報誌を用意しています。

『白門書房』アプリについての詳細は、以下のサイトよりご覧いただけます。

【iOS版】

<http://itunes.apple.com/jp/app/id413465097>

【Android版】

<https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.documentcontainer.web>

※Android4.0未満の機種ではご覧いただけませんので、ご注意ください。

iOS版ニューススタンド(2015年リリース)

※定期刊行物である『HAKUMON Chuo』、『中央大学の近況』についてのみ、こちらでご覧いただけます。